

新井中央小だより

ホームページ <http://azalea.ac.city.myoko.niigata.jp/araich-s/otayori/index.html> No.240メールアドレス chuou@ac.city.myoko.niigata.jp 2019（令和元）年8月30日

主体的学び、本物の学び

夏休み中、ある日の夕方、学校校舎前の池（ビオトープ）で、3人の子どもに会いました。待ち合わせていて、これから3人で何かするようです。

「これから、何かするの?」「トンボ捕まえます。糸トンボです。」この辺ではどんな種類の糸トンボがいそうか、具体的に名前も上げて説明してくれました。遊びで捕まえているのではなさそうです。「トンボの標本を作るんです。」そう聞いて合点がいきました。3人チームで主体的に学習としてトンボ捕りをしていたことに気付きました。トンボを捕る3人の姿から、20年近く前に当校で理科を担当した時のある子どものことを思い浮かべていました。

その子（当時小学3年生）は、自他共に認める「虫博士」でした。特にアゲハチョウが大好きで、家で卵、幼虫から育てて観察していました。観察した結果を研究としてまとめ、市の科学研究発表会で発表し、県の発表会にも推薦されたことを記憶しています。

その子と5年ほど前に再会することができました。小学校卒業後も虫への興味は尽きることなく、中学校、高校とずっと「虫博士」としての学びを続けていたそうです。そして、大学も虫の研究のできる学部でフィールドワークをしながら学び続けてきたそうです。大学卒業後は、地元の自然環境調査の公的機関に就職し、「虫博士」の力を生かした仕事をしています。仕事なので、専門の「虫」の他にも「猛禽類」や「魚類」の調査もするようです。ばい煙の調査でしょうか、命がけで高い煙突に登って調べる仕事もあるそうです。

「妙高市の小学生の先輩として、子どもたちに何かしてくれると嬉しいな・・・。」

「いいですよ。」

ということで、ここ何年か、ボランティアとして子どもたちを集めて自然観察会の講師・運営をしてくれています。私も毎年、サポート係として参加させてもらっています。最初の観察会で驚き、感心したのは、子どもたちが捕まえてきた虫について、彼が即座に名前、名前の由来、習性等スラスラと説明していたことです。さすがに好きで学び続けてきた人はレベルが違うなと実感しました。

今年（つい先日、お盆の17日）は、「魚捕り」がテーマの観察会でした。私も張り切って、胸までゴムの長靴を履いて川に入りました。全然濡れないので快適でした。でも、途中で、気付きと学びがありました。素足で入った子どもたちから、「あ、ここから、水が温かい。捕れる魚も違うみたい。」という言葉が出た時です。五感を通して学んでいる子どもたちに感心すると同時に、快適さと引き替えに失っているものがあるんじゃないかということに気付きました。「今度は素足で入ろー。」

妙高市は、体験を通した学びを大切に、「ほんもの教育」をずっと推進してきました。その取組の中で、「虫博士」が生まれたり、自分の好きなことでずっと学び続ける人材が生まれたりしているとも考えられます。体験を通して学んだことは、簡単には剥がれ落ちない確かな学力となります。自分が好きなことを主体的に学ぶことは、それが仕事にならなくても、生涯学び続ける豊かな人生につながります。

2学期が始まりました。日々の学びの中で、どんな「〇〇博士」と出会えるかな。楽しみです。

校長 加藤 晃